

会 報

日本福音ルーテル東京池袋教会

〒171-0014 豊島区池袋3-7-1

☎3984-3853

<http://www.jelc-ikebukuro.org/>

2016-3

発行日 2016年9月25日

絵本と信仰

「かみさま すてきな おくりものを ありがとう」



かみさまからの おくりもの

ひぐち みちこ



牧師・ 青田 勇

この絵本は、1984年に「こぐま社」から出版された『かみさまからのおくりもの』という本です。赤ちゃんが生まれる、それは神様からの贈り物である。一人ひとりのお母さんに神様が天使を通して、それぞれに違う赤ちゃんを与えてくれる……という簡単な内容のことばでつづられています。

「あかちゃんが うまれるとき かみさまは ひとりひとりの あかちゃんにおくりものをくださいます。」「かみさまからの おくりものは てんしが はこんでくるのです。」

「ほっぺの あかい あかちゃんには このおくりものが いい。とどけて おくれ」

「はいかしこまりました」「てんしが はこんできた おくりものは よく わらう でした。」

「あかちゃんは よく わらう あかるい こどもに なりました。」

このように絵本の中では、5人の赤ちゃんが描かれています。それぞれに違う贈り

物が天使よりお母さんに与えられます。

「ほっぺのあかい赤ちゃん」には「よくわらう」、「大きい赤ちゃん」には、「ちからもち」、「泣いている赤ちゃん」には、「うたがすき」、「よくごく赤ちゃん」にはも「よくたべる」、「すやすや寝ている赤ちゃん」には、「やさしい」。

それぞれの赤ちゃんにすばらしい賜物が神から与えられています。親の望みや希望でなく、その赤ちゃんそのものにそれなりの素晴らしい賜物が神から一方的な恵みとして与えられています。

そして、この絵本は、母親、親への神の贈り物は何であるかを教える絵本でもあります。

その子供の「笑い」、「涙」、「歌声」、「寝顔」、「動き」すべてが親への神からの一方的な贈り物なのです。

けれども、人間いうものは欲望が深いもので、息をして生きていてくれればうれしいという感覚は次第に薄れていき、『早く歩いてほしい』『じょうずに色々、話してほしい』『工作とか、絵がうまくなってほしい』とか、神からの贈り物に期待をさらに強く抱いてしまいます。

そして、それだけでは満足しないで、『成績優秀になってほしい』『何かに優れて、人よりもスポーツがうまくなってほしい』といった欲望がとめどもなく高まってしまうのです。

この絵本が伝えること少しつながる物語が旧約聖書にあります。それはサムエル記上2章1節以下の「ハンナの祈り」と言われるところです。ハンナという女性は子供が授かるように、悩み嘆き、激しく泣きながら神殿で祈ります。

その祈っている時に、こともあろうに祭司エリは、彼女が酒によっているのではないかと誤解するのです。だれも、そこまで落ちたハンナの悩みと苦しみは理解できないのです。ですから、誤解が生れても当然と言えば当然です。祭司エリも理解できないのです。夫エルカナもそうです。では、この悩みと嘆きをハンナは誰にぶつけたのでしょうか。これが最も大事なことです。ハンナにとって、残されている相手は、神のみです。神に彼女は誰にも言えない悩みと嘆きを吐き出したのです。誰にも理解されない苦しみの中からの心からの願いを神に吐き出したのです。神にすべてを委ねたのです。苦しい自分そのものをすべて神の前に差出したのです。もう他には、なんの手助けもないハンナ、その彼女を神は心に留め、顧みてくださるのです。神こそがだれよりも、彼女の悩みと苦しみを知っていたのです。

そして、念願のサムエルが神の恵みの贈り物としてハンナに与えられた時に、彼女はサムエル記上2章1節で「**主にあってわたしの心は喜び、主にあってわたしは角を高く上げる。私は敵に対して口を大きく開き、御救いを喜び祝う。聖なる方は主のみ。**」と高らかに喜びの気持ちを歌っています。さらに、その賛美は10節までである長い歌となっています。

この聖書の状況からすると、サムエルが生まれた時にハンナはこのような歌を歌ったように書かれていますが、実は、これはサムエルの誕生の時だけ歌われたのではなく、サムエルが乳離れするまでの期間の間、ちょうど子守り歌のように、毎晩、またはサムエルを寝かせる時にハンナは繰返し、サムエルの傍らで歌い続けたのだと思います。

サムエルのために、その成長を見守りながら、ハンナは「**主の慈しみに生きる者の足を主は守られる**」という言葉のように、この歌を自ら心の底で密かに口ずさみ、そして、サムエルが大きくなって、もう子守唄は必要なくなっても、それは彼女の祈りとなり、この歌は彼女の心の中で口ずさみ、繰返して、祈りと共に神への感謝の歌であり、この祈りの歌を通して、神からの贈り物である息子サムエルの成長のすべてを母ハンナは神の業に委ねていったのです。

暗闇くらやみから光へ

～父と母への思い～

森 徹

お願いします。今日は・・・」病院の父のベッドの傍らで祈っていた。昨年10月12日、私の誕生日、その4日後の10月16日の夜前立線癌で父森浩一は召天しました。尊厳、威厳、莊厳、一すじの光の中につつまれた信仰の内にある安らかな死でした。

母森幸子は、昨年の3月より胸椎圧迫骨折による胸髄損傷により歩けなくなり、父の癌の介護も止めなければならず病院に入院、体調の問題で手術することができず。リハビリテーション病院から介護保健施設そして現在の特別養護老人ホームへと移っていくことに。教会にも行けなくなりどんなに辛いことだと、ただ思うばかりです。父にも母にも「代われるものなら代わってあげたい。」と何度も思いました。それでも最近母はリハビリの成果か要介護度が4から3になり、今は週1度の面会でも好きな物を食べ微笑んでくれて、私との会話も弾んでいるようにも見えます。

父のことに戻りますが、塾の講師をしていたことと特にキリスト教については学者のように本を集め、読んでいたこともあり、私にとってはキリスト教の歴史学、考古学、言語学の教授でもありました。祖父は筋ジストロフィーによる病気で私が幼い頃に召天していますので、祖母それから父と満州、戦争と体験し平和を願った家族、歴史書である日本人がまたいなくなってしまうことをとても寂しく感じています。

両親の住まいに同居していた私は昨年の4月から二人の病院の行き来が中心の生活となりました。そういった中、牧師先生や教会員の方々、親戚の方、地域の包括の方や保健師様などにたすけられながら、そしてうつ病と不安障害、アトピー、前立腺肥大をかかえ治療しながら今日に至っています。わたしは堅信礼を受洗のあと信仰の迷

いから仕事にかこつけて、クリスマスイブ礼拝に数回でるだけになるほど教会とは遠ざかっていましたが、両親が入院したことにより日々の祈りをかわりに自然とするようになっていました。

青田牧師には両親に面会にも来ていただいたこともあり父の葬儀は火葬礼でしたが生前から両親の事など家族のように相談するようになっていました。そして戸惑う私に教会への導き、祈りの入り口をまた開いてくださり、斎場にはたくさんの教会員の方が来て下さいました。本当に感謝してもしきれません。そして両親への感謝もこのとき一層増しました。その後青田牧師より教会にできれば月1度くらいは来たらどうかとお話しいただき、また池袋教会にもどるきっかけをつくっていただきました。そして時をおいて告別式も教会でしていただき、今年の4月墓前礼拝で祖父母が眠る多磨墓地に納骨することができました。父の死後に訪れた教会の建物は新しくなっていますが子供の頃、教会学校、修養会に参加していたときと同じどこか懐かしい香りが漂っていました。私にとってのホームのような感触、そこにはたくさんの優しさや暖かい心もありました。かけがえのない場所にかけがえのない自分自身が戻って来た瞬間でもありました。

精神が不安定だった私は何年も前より何度も生きる自信を失うことがありました。母も急な入院によりいろいろな辛さや混乱からうつ病になることがあり、生活や私のことを心配して不安を口にすることがたびたびありました。だから去年は本当に一人で暮らすのが怖かったです。牧師先生、教会員の方々、親戚の方、地域の方々に自然とどんどん自分を開かざるならなくなり、その開くことで感謝することがどんどん増えてきています。皆様にささえられ励まされながらここまで来たことは両親のおかげでもあることを大変感謝し、母を大切にすると同時にかけがえのない自分を大切にするという生きる力を与えていただきましたことはこれをどのようにかえしていけばいいかわかりませんが、これも日々の祈りで神に問いかけている毎日です。

現在私は地元の社会福祉協議会の就労支援センターに協力していただき就労を目指しています。この先、生活、就労など不安なことはたくさんありますが、神様、皆様からいただいた生きる力をこれからはもっと^{はぐくみ}育み強くし、祈りの中の感謝、喜びのもとに父の死で見た光とは別に眩しくも穏やかで居心地のよい光を見て浴びれることを信じながら、できるだけ教会には父の見守りの中母と同行しているつもりで足を運び歩んで行きたい。今これを書く機会を与えられている自分も奇跡が与えられているのでしょうか、それとも神の導きの必然でしょうか、これからのことも今後神様に問いながら暮らしていきたいです。



私の人生の歩みを振り返った証しの機会

池谷 孝雄

今年4月にCGNTVという韓国メガチャーチの日本伝道向けテレビ番組でインタビューを受けました。その中で、私がクリスチャンとして歩んできた半生と仕事をお話する証しの機会がありました。入信、海外で最初の就職、聖書学校、結婚、そして帰国後美術品輸送との関わり、そして今置かれた中での信仰者として何を目標として生きているのか等を話させてもらいました。今回、会報の主旨が、顔の見える教会員を目指してということですので、私という個人を知って頂くのには一番手っ取り早いとおもいました。1時間ほどありますが、下記にアドレスを記載します、どうぞアクセスしてご覧になって下さい。

<http://japan.cgntv.net/program/2305/sub3.asp>

私が高校生時代に洗礼を受けた教会をはじめ、海外で所属していた教会では、“証し”というルーテル教会ではあまり耳にしない、いわゆる自らの入信のいきさつ、今の信仰者としての生活、日々示される神様からの具体的な教え、体験を教会員の仲間たちと分かち合う、“証しする機会”が多くあります。3年前に晴れて正式な教会員となり、私自身の事を少しずつお話したいと願っていましたが、半生を振り返った証しの機会は無いままでしたので、改めて自己紹介として私の証しを番組でお聴きください。パソコンをお持ちでない方の為に、限りなく短く下記に私のプロフィールをしたためましたのでご参照ください。

池谷徳治、正代の長男として、昭和25年8月31日生。満66歳、弟邦男の二人兄弟。祖母、母親の影響で幼少のころから教会に馴染む。

高校の時に hi-b.a.通じて、新生の体験。1968年、同盟基督教団椎名町教会野畑新兵衛牧師より受洗。東京農大卒業後カナダ・トロントの造園会社に就職。途加2年目にバイブルカレッジ入学、聖書一般2年コース卒業。帰国後航空貨物専門会社に就職成田開港時勤務。シンガポール駐在、結婚。ロンドン勤務中英国ヤマト運輸に転職。帰国後ヤマトロジステイクス美術品輸送カンパニーにて国際営業に従事現在に至る。

フィンランド宣教師のおもいで

及川照子

神様の深い御愛に感謝してペンを取らせて頂きます。私をはじめ母の生家のあった飯田に入りましたのは小学校六年の夏休みも終り近い頃でした。はじめて来日なされたニエミ テーネ師と母は先に宣教師館にいらして私も母と共に住むようにとニエミ師の強い御厚意によるものでした。父の両親の許で暮らしていましたがニエミ師と母と三人で暮らせることを天にも登るうれしさに御座いました。ニエミ師はその頃は二十歳代中頃でいらっしやうと覚えて居ります。

私の転学の手続き、その後県立飯田高女への入学手続きなど母のすることを皆やって下さいました。私にはとても楽しいゆめの様な日々でした。

当時はまだ飯田地方では外国の方を異人さんと呼びながめる人がほとんどでした。ニエミ師は飯田幼稚園の園長として近隣の子供たちを熱心に教育なさっていらっしやいました。その間盛り場をはなれて物乞いをしていた老人を家につれて来て、しばらく面倒をみて、たしか四国の愛生園と云うホームに入れる様な手続きまでなさいました。又飯田二本松と云うところの遊郭の女の人がクレゾールを飲んで自殺をはかったのを助け、ずっと共に暮らし洗礼も受けてブラジル移民の人と結婚出来ることとなりました。大黒タキさんと云う人で東北の人でした。どんなにか感謝にみちた生涯を送られたことでしょう。

私にはかなりきびしく色々おしえて下さったことを覚えております。学校の行事にもよく行って下さいました。私の学友などもよく呼んで下さって神様のお話のうちに茶をいただきながら皆楽しく過ごしたことなど思い出されます。私が卒業近くなった年の春ニエミ師には最初の伝道を終わり、フィンランドへ帰国なさる時が近づいて私には残る日々はかなしみのうちに過ごしました。その後は今の東京ルーテル教会でカレン師御夫妻とおめにかかりました。上のお子様お三方をおば様（リユーリ・タティ：リユーリおばさん＝フィンランド語）にお預けになって下のお子様をおつれになっていらっしやいましたカレン・イレーネ奥様、カレン・アルトリ宣教師もそれは家族同様に歓迎して下さいました。つたない私のフィンランド語はこの子様からおばえたもので幼子語が沢山入っております。

ニエミ師は再来日なさって札幌のめばえ幼稚園園長としてお働きになりました。いま天国で過ぎし日本伝道の日々を思い出されていらっしやうことでしょう。「わたしはもう一人の貴女のお母さん」と、おっしやうていらっしやいました。大岡山教会会員の（弁護士）早川さんも‘お母様’とおよびしていらっしやいます。二人の会話の時にいつもアイティ（母＝フィンランド語）とおよびして居ります。遠く過ぎし日は忘

れがたく又いつも胸に感謝と喜びにみたされます。私の母はニエミ師に私の事はすべておまかせしていた様に思います。なつかしきもう一人の母ニエミ師をいつも想い出し感謝の日々をおくっております。

私にとってのルーテル教会

(義認 II)

難波靖雄

③ キリスト者の歩みにおける「義認」の位置付け

では「義認」はキリスト者の歩みの中のどこに位置付けられるのであろうか。いきなり脇道に逸れるが、海外での二つの経験をお話したい。

ー 1 ー スウェーデン駐在時代

ストックホルムでは、牧師はアメリカ人、教会員はアメリカ、ヨーロッパ、アジア、アフリカ等世界各国の出身者という **International Church** で礼拝を守っていた。(礼拝出席約200名)、そして、そんな教会生活とは別に、日本で牧会を経験したことのあるスウェーデン人牧師(引退牧師)の指導を仰ぎながら、日本人の他宗派の方々と聖書を中心とした学びの会を毎月開いていた。そこである時、皆さんのリクエストでルーテル教会の信仰のあり方について話すことになった。私ごとき浅学の、しかも信徒が話すべきテーマではないのだが、あくまで私個人の考え方、乃至はルーテルにおける信仰のあり方と私が考えていることに過ぎない旨を断わった上で引き受けることとした。

やや極端かと思いながら話したことの要旨は以下の通りである。

「私達は神の一方的な恵みによって、罪人のまま義とされているが、その義とは不完全なものでも仮免的なものでもなく完全なる義(完全なる義人とされる)なので、それ以上はない。つまり、これから善行を重ねる、或いは修行を積んで行くことによって完全な義を目指すのではなくて、既にそれは神の恵みによって私たちの中で成就している。従って、義認は終着点である。その先はない」

反応は、予想通り「納得できん」というものであった。何故なら、彼らが大切だと考えている(と私は認識している)のは、義認よりむしろその後の「聖化」だからである。洗礼に与って義とされることは、終着点どころかむしろ出発点で、そこから日々清らかな生活を心掛け、主の御旨に沿った善き行いを主の導きによって積み重ねて行く、そのことによってより聖なる者へと変えられて行く、それがキリスト者の歩みで

あり、キリスト者として最も大切なことだと考えているのだと思う。ついでながら言うと、ルーテルで、「聖化」という言葉を聞くことはまず無い。別の機会だったと記憶するが、彼らから「聖化」を示す以下の聖書の箇所について、ルーテルの信徒はここをどう読むのかと詰め寄せられ、返答に苦慮したことを思い出す。ルーテルでこの箇所が取り上げられることは、ほとんどないのではないだろうか。

「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」（口語訳 第2コリント3・18）

－2－ フランクフルト時代

2004年の夏だったと記憶するが、ルターとバッハ縁のドイツの地を5日掛けて車で旅したことがある。当然ヴィッテンベルクも訪れて一泊したのだが、ちょうど徳善先生が同地にいらっしゃった時だったので挨拶に行き、食事をしながら色々話をさせて頂いた。その時に、「義認と聖化」の問題をぶつけてみた。先生の答えは、「義認の中で聖化は起こる」というものであった。私はこれを「義認があってその後聖化があるのではない。義認という大きな技の中に聖化が包含される」と受け止めた。そしてもしその理解が間違っていないのなら、－1－で述べた、「義認は終着点」という考えも、まんざらの外れではないのではないかと、我田引水的に思った。

これらの経験を契機に、私自身「義認と聖化」の問題を随分考える様になった。神の恵み、主の十字架と復活の完全性を考えれば、義認で全てが完結すると考える方が論理的な感じがする。しかし、自らの現実を省みると、とてもじゃないが完結するどころの騒ぎではない。今はもちろん不完全であるが、日々聖なるものを仰いで歩いていく、そんな「聖化の歩み」をしている存在と自己規定する方が、余程自然で心が平穏になる感じがする。これが偽らざる思いである。この論理的思考と現実の折り合いをどう付けるのか。義認を人生の歩みのどこかの時点、つまり時間的な点で捉えようとすると、「その後はどうなるの？」という問題が必ず出て来る。勝手な考えで間違っているのかも知れないが、「義認」を人生のどこかの時点での出来事と考えるのではなくて、人生全体（神の時間では点に過ぎない？）を「義とされる歩み」と捉え、「聖化」は「義認」の当然の結果として、或いは「義認」と不可分なものとして同時に起こると考える、つまり人生全体をいわば点と捉えその中で「義認」が起こると考える。そして「聖化」も共に起こっていると考えると、「義認が終着点」でも落ち着く感じがするのである。

ルターは「キリスト者の自由」の前半で、「善き業が大切であるからと言って、決して間違っはいけないのは、善き業によって人が義とされる訳では断じてない。義とされるのは、あくまで信仰による」と言っている。正に信仰義認で、改めて引用する必要がない程当たり前のことである。しかし、後半では「地上においては、発端と前

進とがあるだけであって、完成されるのは彼岸の世界においてである」と言っている。この世にあって、完成はないと言っているのである。従って、この世にあっては「善き業」が大切であると説かれ、「義とされた者の善き業」についての勧めがなされている。義とされた者はそこに留まるのではなくて、そこから善き業、愛の業へと押し出されて行く、義とされたことの当然の果実として善き業があることを力説していると思うのである。

ルーテルにおいては、「信仰義認」が余りに強く言われる一方で（そのこと自身は全く正しいと思う）後半部分の「善き業」が余りに弱い。そのことがルーテルの弱さに繋がる、即ち、教会が力強さに欠け、衰退して行く根本的な理由なのではないだろうか。

いずれにせよ「義認」がどこに位置付けられるかは、「義認」をどう理解するかにかかって来るのだと思う。今も自分自身の中で揺れ動いてはいるが、「聖化」を「義認」の中で捉えるということで、敢えて「義認が終着点」で良いのではと現時点では考えている。

④「義認」はなぜ起こるのか

話の前提として神と人間の関係を考えてみる。勿論、あくまで私見である。最初に人間が創造された時点では、当然のことながら神と人間は正常な関係、つまり両者が固く繋がった関係であったが、アダムの墮罪以降この関係は完全に断絶してしまった。しかし、神はそんな状態を良しとせず、この関係を修復された。その修復の業は、キリストの十字架と復活によって実現したのであるが、それを人間の側から「救い」とか「赦し」とか「義認」という言葉で表現しているのだと思う。やや乱暴かも知れないが、「救い」も「赦し」も「義認」も本質は同じ事である。全て人間との関係を神の側から再び繋ぐこと、修復することである。そして、そんな神の業を人間は「愛」とか「恩寵」とか「恵み」と受け止めているのである。これらも全て本質は同じことである。更に言うなら、少なくとも新約聖書は神と人間が繋がった状態を「命」、切れた状態を「死」と表現しており、関係を切ろうとする人間の営み或いは思いを「罪」、それをそそのかす存在を「悪魔」と呼んでいるのだと思う。聖書の世界、或いはキリスト教の教理の全てはこの構図、神と人間の関係の変遷の中に包含されるのだが、その中の最も重要な部分、神学の要の部分の焦点は神が人間との関係を修復する業に集中して当てられていると思うのである。

この全体構図を踏まえた上で、神は何故人間を義とするのか、罪人であるにも拘わらず義人とみなし給うのか（＝何故救うのか、何故赦すのか）、そのことを考えてみたい。長い教会生活における色々な説教、議論、対話を思い出してみても、「神は何故人間を救うのか、義とするのか」が正面から問われることは、まずなかったように思う。福音、即ち罪人である人間を義とする神の愛、恵み、憐れみがひたすら説かれ、人間

はそのことを認め、感謝し、そんなありがたい神を信じるべきであると勧められるのであるが、そもそも何故神は人間を救うのかなんてほとんど考えないのではないのかと思うのである。神は愛の神なのだから、人間を救うのは当たり前、それが神なのだからと言わんばかりである。しかし、このことを推し進めて行くと、神は人間に幸せをもたらす存在、メリットをもたらしてくれる存在ということになって、神は人間の幸せの為に存在する、即ち神が人間の為に存在する、極論すると人間がそんな都合の良い神を創造するという、とんでもないことになってしまう。これまさしく「宗教」の世界であるが、うっかりしているとキリスト教もそんな宗教に墮落してしまう危険性を孕んでいるのだと思う。

話を戻して、では何故神は人間を救うのか義とするのか。この問題を考えるには、そもそも神は何故人間を創造したのかという原点に戻らなければならない。人間の創造の業に人間の意志は全く関係ない。100%神の意志で人間は創造されたというのが先ず出発点。では何故創造したのか。勿論、人間が神の意志を押し量ることなど不可能なので、あくまで推測ではあるが、神は何らかの神の目的を達する手段として、つまり神御自身の為に人間を創造したと考えるのが自然である。創造の業に人間の意志は一切関わっていないのだから、人間の為に人間を創造することは論理的にもあり得ない。ではその神の目的とは何か。それは、神の栄光を現す存在の創設ではないのか。つまり神の栄光を現す存在として人間を創造されたのではないのかと思うのである。

何か所か聖書を引用したい。

「神は自分のかたちに人を創造された」(創世記1:27)「神のかたち」とは神の栄光を現すことのできる存在と受け止めたい。

「神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった」(創世記1:31)、創造の段階では人間も神の意図に沿った、栄光を現す存在であったのだろう。そして、アダムの墮罪まで人間はエデンの園で神と共にあったのである。悪魔の誘惑に負け、神に背き、エデンの園を追放されてからは長く神と人間の関係は断絶していたのであるが、十字架と復活により関係が修復された。修復されたということは、言葉を変えると人間がアダムに回帰したということである。ということは、人間は再び神の栄光を現すことができる存在になったということで、まさにそれこそが神が人間を義とされた理由なのだから、私達はそのことをしっかり認識し、生きなければならない。「義として下さってありがとう！」で終わってはイカン。そう思うのである。

「あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」(コリントI 6:20)

「万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように」(ローマ 11:36)

ルーテルにおいては、「聖化」同様「神の栄光」という言葉を聞くことはまずない。もっぱら、「救い」「義認」即ち私達が神からどれだけの愛、恵み、恩寵を受けているか、

つまり「福音」が語られる。勿論、聖書のメッセージの要であると思う。しかし、そこに留まっているのではないのか。ではルターは留まっているのだろうか。決してそうではないのではないのか。ろくにルターの著作を読んでいない私に語る資格はないのであるが、ルター、ルターと言いながら、その実一部を切り取っているだけではないのかという思いを拭うことができない。来年ルター500年を迎えるということで、当然過去を振り返ることになるのだろうが、これまで言われて来たことを単に繰り返すのではなくて、現在の日本の立ち位置から、ルターの原点をもう一度深く探求する必要があるのではないだろうか。義とされた者の歩み、それに相応しい善き業とは何なのかという点にもっと焦点を当てるべきではないのだろうか。

⑤結び

年初から「義認」というテーマに取り組んで七転八倒した。自分の無力さ、未熟さを思い知らされた。何度書き直しても、すっきり論旨が通った文章には遂にならなかった。

こんな拙文を読まされたのでは溜まったものではないだろうかと、申し訳ない気持ちにもなった。あと何年考える時間が残されているか分からないが、「義認」はルーテルの信徒として避けて通れない最重要テーマであるで、これからも思考を続けたい。できることなら議論によって深めて行くことができればと願っているのだが。(完)

婦人会活動報告

山口悠子

6月19日の礼拝後、昨年に続き岡安大仁兄をお迎えして「八木重吉と登美子夫人」の会を婦人会主催で開催しました。初めに司会の坂上姉が、重吉の、登美子夫人をこよなく愛し一途な信仰を持ち続け、2000を超える詩を残した29年の短い生涯を年譜に沿って説明し、その中で登美子夫人の著作である「琴は静かに」を取り上げ、重吉と同じ病の結核で15歳の短すぎる生涯を終えた二人の遺児、桃子さん、陽二君の葬儀を池袋教会において牛丸そう五郎牧師が執り行ったとの記述を朗読しました。その年(1937年)登美子夫人は池袋教会に転入なさっていましたが、思いがけない池袋教会との深いつながりに一同感動を覚えました。次に6人の方がご自分で選んだ詩

を朗読なさり、その詩についての思いを語りました。そして登美子夫人が池袋教会の礼拝にいらしていた頃交わりのあった及川照子姉、久保コト姉、江崎ふみ姉が登美子夫人のやさしく凛とした信仰をお持ちのお姿について貴重なお話をしてくださいました。まとめとして、岡安兄が重吉の詩を見出した草野心平、高村光太郎の文章を朗読なさり、吉野秀雄氏と再婚後の登美子夫人の鎌倉のお宅を、兄上の岡安恒武兄、牛丸省吾郎牧師とともに訪問なさった思い出を語ってくださいました。最後に珠川純代姉が重吉、登美子夫人が度々口ずさんでいたシューベルトのセレナーデをハープで演奏してください静かに会を閉じました。

この会に出席して下さった40名余りの方々の中にも、八木重吉の詩に深く親しんでいる方、あまり馴染みになかった方など様々でしょうが、各々が「八木重吉と登美子夫人」のいろいろな面に触れて、思いを新たになさったのではないのでしょうか。

7月例会記録（7月17日）出席者；壮年2名、婦人10名

奨励：青田勇牧師 ローマ書2：1～10 「平和とは」



(報告事項)

* 7月3日（日）夏物小バザーを開催し 26,730 円の売り上げを得ました。

皆さまのご協力に感謝いたします。

* 女性会連盟関係

①女性会連盟より地震に見舞われた九州地区各教会女性会へ「形に見える寄り添い」として各教会女性会から献金をお願いしたいとの依頼があり、池袋教会婦人会では、小バザー売上金 26,000 円、手作りカード売上金 4,000 円、合計 30,000 円を連盟の口座に送金しました。

②東教区女性会より一日神学校（9月22日）ミニショップへの献品依頼があり、池袋教会婦人会として手作りカード 20 枚を東教区女性会担当者に送付しました。

* 7月24日牧師館オープンハウスの時にお招きする方々へのおもてなしとして、婦人会の有志がリンゴケーキを作りました。いつも使用している紅玉の時期ではないのでお味に不安も残りましたが、皆さまとても喜んでくださりほっとしました。 .

教会と私 ～みちびかれて～

加藤 雅代

私は鹿児島市で両親と兄の4人家族の末っ子として生まれました。子供の頃は、今で言う、超がつくくらいの悪童であった2歳上の兄についてまわり、大変活発なショートカットの元気な少女だったと記憶しています。その反面、本を読むことも好きで、最初にキリスト教に触れたのも、小学6年生の冬に三浦綾子さんの「塩狩峠」を読んだのがきっかけでした。

暴走列車を止めるため、自身の身を線路に投げ、列車を大惨事から救った主人公の行動は、子どもであった私には大きな衝撃でした。自らの命さえ投げ出す尊い犠牲、そのような青年を育んだキリストとの出会い、また、そこに至るまでの人としての葛藤、それらが、心を打ってやみませんでした。キリスト教会に行きたいとの想いは日々大きくなり、このことがきっかけで、教会に初めて通うようになりました。私自身が救いにあずかるのは、この後まだ随分後のことです。

鹿児島にあるミッションスクールの短大に在学していた頃から、しばしば「自分の罪と救い」について考えるようになりました。カトリック研究会というサークル活動にも参加していましたが、当然のことながら「罪と救い」という問題は、研究して得られるようなものでは、決してありませんでした。

短大を卒業し社会にでると、仕事上の悩み、職場の人間関係、また、自分を取り巻く交友関係など、悩むことも多くなり、心から、神様の助けを真剣に求め、祈るようになりました。聖書を読み、祈る日々の中で、自分の罪を知り、イエス様に「ごめんなさい。」「こんな私を、どうぞよろしくお願いします。」と言えるようになりました。

その日から、30年以上の年月が流れ、懐かしい九州の地を離れ、東京池袋ルーテル教会に、^{こんにち}今日このように導いていただきました。未だに弱き者ではありますが、イエス様のお導きに「ありがとうございます。」と毎日感謝して過ごしております。

教会の主な集会・行事予定

- ◆ 9月18日(日) 敬老の日を覚えて礼拝、礼拝後、軽食・祝会 婦人会(お休み)
- ◆ 9月20日(火)午後2時 婦人の聖書会 ルカ22章14節～23節
- ◆ 9月22日(木)午前9時半「一日神学校」ルーテル学院 パイプオルガン特別演奏
- ◆ 教会バザー 準備会

手作り作業（午前 10 時 or 午後 1 時）

カルリヤパイ 9月22日

鮭パイ 29日

リンゴケーキ 10月 6日

キャベツスープ 15日

- ◆ 10月9日(日)礼拝後、定例役員会 手話の会
- ◆ 10月12日(水)午後2時 聖書に学ぶ 第二テモテ4章6節以下
- ◆ 10月16日(日)礼拝後、教会バザー
- ◆ 10月18日(火)午後2時 婦人の聖書会 ルカ22章24節～30節
- ◆ 10月26日(水)午後7時 聖書を読む会
- ◆ 10月30日(日) 宗教改革主日礼拝
- ◆ 11月2日(水)午後2時 聖書に学ぶ 第二テモテ4章9節以下
- ◆ 11月5日(日)午後3時 墓前礼拝(多磨霊園)
- ◆ 11月13日(日)礼拝・子供祝福式
礼拝後、婦人会 聖書研究 ローマ書2章12節から16節
- ◆ 11月15日(火)午後2時 婦人の聖書会 ルカ22章31節～34節
- ◆ 11月20日(日)礼拝後、教会大掃除 「教会バザー」感謝会
- ◆ 11月30日(水)午後7時 聖書を読む会
- ◆ 12月4日(日)礼拝後、ミニバザー
- ◆ 12月13日(火)午後2時 婦人のクリスマス会
- ◆ 12月14日(水)午後2時 聖書に学ぶ 第二テモテ4章19節以下
- ◆ 12月18日(日)礼拝後、教会のクリスマス祝会
- ◆ 12月24日(土)午後7時 クリスマスイブ礼拝